'83回顧

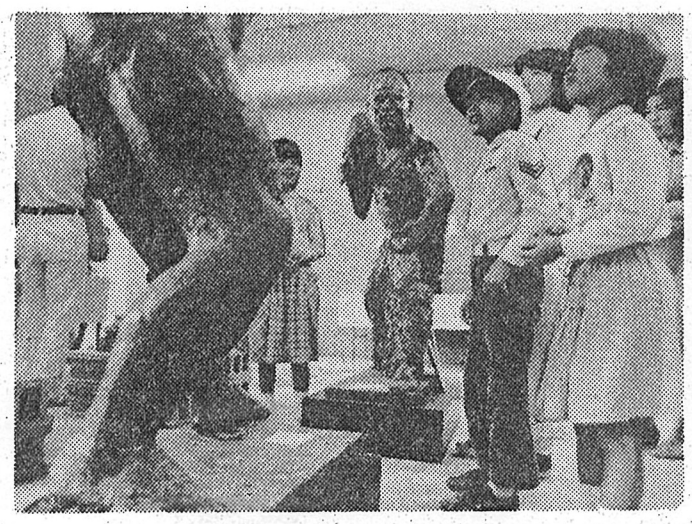
美術

<8>

活気見せた海外出展

前衛的作品も質高まる

稲嶺成祚



稲嶺成祚氏

にぎわった沖展

今年はどうだったかと振り返るとき、よほどの変化なり、出来事なりがなければ、去年とそう変わったようには思えないものである。美術界についても同じで、この小論を書く羽目になるまではそうであった。しかし、筆をとって考えてみると、一応は今年の特徴とか、記録しておくべきことなど、いくつかは指摘できそうである。

一月に永原達郎氏の個展が、クラフト国吉ギャラリーであった。インドのテーマが主だったが、その瀟洒（しょうしゃ）な写実で目をひいた。四月には永津禎三氏が県民アートギャラリーで約八十点にのぼる作品を展示し、これまでの仕事のほぼ全容を紹介した。永原氏は千葉から、永津氏は名古屋から移住し、これらの個展が沖縄での初の作品紹介となったわけである。これまで質の高いアーチストが沖縄に腰をすえて仕事をした例はなかった。今後の二人の活動が沖縄の美術界を大いに活気づけるものと期待される。

……

今年の沖展は三十五周年を記念して、沖展に関係してきた物故作家の作品を展示するとともに、沖展以外で発表し活躍してきた六十人余の作家の仕事も紹介した。これで名実ともに沖縄の美術家の作品が一堂にそろい、大変な人出でにぎわった。絵画彫刻に関する受賞者は次の通り。△絵画▽沖展賞・鎮西公子、奨励賞・与久田健一、浦崎彦志、吉山清晴、準会員賞・和宇慶朝健△彫刻▽沖展賞・小橋川義信、奨励賞・新垣幸俊、当真勲、準会員賞・富元明雄。

ここ数年来、東京展のみならず、海外展にも参加して入選入賞する画家たちがふえてきたが、今年もこうした傾向は続き、昨年以上の活気を呈した。

まず、年明けの一月に「第十七回モンテカルロ現代芸術国際グランプリ展」に奥原崇典氏が入選している。六千点の応募の中から二百点が入選というのだから、かなりの難関ではある。

具象作品増える

六月になって第九回欧州美術国際展の「スペイン美術賞展」に沖縄新象展のメンバーを中心に大量十八人が入選、作家フランス展」に招待出品として八人が作品を送り、十月にはフランスのサロン・ドートンヌ展に城間喜宏氏が招待出品し、十二月には会員に推挙された。美術の本場といわれたパリの由緒ある展覧会の会員とは快挙である。

国内展での受賞も例年通りいくつかあった。まず第五十七回国画会展の新人賞を永山信春氏が受賞、新美術協会展で審査員でもある与那覇朝大氏が日本港運協会賞を受賞、新象展で屋良朝彦氏が奨励賞、彫刻の上江洲由郎氏が佳作賞を受賞した。「第十六回現代日本美術展」（毎日新聞社等主催、隔年開催）に青山映二氏が入選した。もっとも前衛的な作家たちが目指し、その登竜門としての役割をもつこの現代日本美術展への入選は、沖縄の前衛的な仕事も地についた質の高いものとなってきたあかしとなろう。

第十二回県展は、去年にくらべて質が高く、入選者の数もふえた。傾向としては抽象作品が減り、単純な写生ではない具象作品がふえた。これは抽象と写生との間で、各自がユニークな仕事をしようとする表れであり、喜ばしいことである。受賞者は次の通り。県知事賞・川平恵造、県教育長賞・和宇慶朝健、奨励賞・上江洲由郎、伊元隆一、宮城孝也。

七月に第一回グラフィックデザイナークラブ展が県民アートギャラリーで開かれた。沖縄のグラフィックデザイナーが大同団結して各人のこれまでの製品化された仕事をみてもらおうというのである。これまで散発的に個展やグループ展はあったが、県内のデザイナーを網羅しての作品展は、これが初めてであり、これも画期的なことといえよう。

団体展もにぎわう

印象に残った個展も数多い。詳細はぶいて氏名のみ列挙する。永原達郎、城間喜宏、神山泰治、永津禎三、大見謝文、真喜志勉、儀間朝健、金城規克、大嶺政寛、砂川喜代、翁長自修、新城剛、大浜英治。

今年になって急激に様式を変えた人、あるいは変えつつある人の名もあげておきたい。彼等にとっては今年が大きな節目となるかも知れないからである。神山泰治、和宇慶朝健、砂川喜代、青山映二、金城規克、山内盛博、朝内信二郎、大浜用光。

さまざまな団体展は、例年通りの賑（にぎ）やかさで開かれた。新しくできたのには、ささやかに第一回展を開いた中央美術協会沖縄支部展（会長・渡慶次真由）がある。

やんばる絵画同好会が、今年から「名展」と名称がえした。中部美術展も今回から「沖縄文化協会美術展」となった。ユニークな仕事を発表してきた宮古の「彩の会」の本年度の那覇での展覧会は中止となった。地方展の運営の困難さがしのばれる出来事である。

今年は那覇にあるメインの画廊が二つとも新しく出直した。まず四月にクラフト・クニヨシギャラリーがOTV裏のビルに移転し、常陳と展示用のスペースをもつ画廊として発足、海外の版画展などユニークな企画をみせている。九月には沖縄物産センター画廊が二つの豪華な展示室をもって約二カ年ぶりにオープン。美術ファンを喜ばしている。画廊沖縄は、今年初め、沖縄の十三人の画家の作品で東京展（上野・松坂屋）を企画した。地元作家を広く紹介しようという熱意は評価されてよいだろう。

美術評論についていえば、今年になって両新聞に工芸月評が開設された。沖縄タイムスは伊差川新氏、琉球新報は宮里一夫氏が担当している。沖縄タイムスが六月から対談形式による美術月評を開始した。二人の視点からものが見れるという点では、これまでと違った味わいが期待されよう。

六月一日から四日までの沖縄タイムス夕刊に「沖縄近代美術略史」（明治・大正の美術家たち）と題して、川平朝申氏の文がのった。当時を生きる人の証言として貴重に思えた。川平氏には今後も広く資料を集め、記録していただきたいものと思う。

（琉球大学・美術工芸）